

芽生えの時—創刊40年を迎える core に寄せて

林 以知郎

(core 第3号編集者)

早春の息吹を感じさせる緑色の表紙に黒字斜字体で *Core* のロゴを配した本誌創刊号が刊行されたのは、1972年6月のことだった。現在の白い表紙体裁に慣れた目には戸惑いを抱かせるかもしれないが、初代編集者を務められた西田 稔、岡山 勇一、および小林 順先輩諸氏が表紙のカラースキームに託された思いがいかなるものであったのか、感じ取れる気がする。なによりも、この研究誌創刊にご尽力頂いた太田 藤一郎同志社大学英文学会会長(当時)がお寄せくださった「巻頭言」の一節が、先輩諸氏の思いを物語ってくれる。

「若い学徒たちの願いがみのり、ここに生新の気みちあふれた研究誌が誕生した。その名も core とよばれる。おめでとう。若者たちの研究にたいする情熱の結晶にたいして、深甚の敬意を捧げよう。創造のくるしさがながかっただけに、そのよろこびは大きい。おめでとう。しかし考えてもみたまえ。core とはまことにだいそれた名だ。(中略)しかし諸君、ひるんではならない。諸君のこの core が、名実ともに斯界の核として発芽し、成長し、大樹となり、いつの日か美しく花咲き、よろこびの盃をかたむける秋の来らんことを、ともに祈ろうではないか。」

本誌が掲げる「だいそれた」誌名 *Core* に託されていたのは、「発芽し、成長し、大樹と」なっていく学びの営みの「核」、やがてはおおいなる緑の樹影

と育つてであろう種子たらんとする思いであった。太田先生が一粒の種子の芽生えに見立ててくださった *Core* の誌名、創刊号の編集者が記した「あとがき」にうかがえるのもまた、種まく者の思いであった。

「皆の長い産みの苦労の中からようやくわれわれ大学院生によるこの研究誌が発刊の日を迎えることとなった。ここに至るまでには、諸先生方の暖かい御助力と厳しい指導を受け、また院生一人一人の熱意と努力の積み重ねがあった。ある日つぼみの開く花もここに至るまでに種子からの長い準備期間がある。」

創刊から40年を迎えようとする本誌が芽生えたあの頃を振り返ってみるのに、上に引いたふたつの文章ほどにふさわしいものはないだろう。第3号の編集に関わったOBのひとりとしてここにしたためようとするのは、創刊号「巻頭言」と「あとがき」に付け加える無粋な脚注に他ならない。

創刊号に収録された4編の論考を挟んで配されたこれらふたつの文章がともに語るのは、*Core* 創刊に先立つ長い「創造のくるしさ」であり、「産みの苦労」である。「あとがき」にいう「長い準備期間」とはいかなるものであったのか。いまいちど創刊号の緑色の表紙を眺めてみるならば、そこにはある時期まで本誌の性格を定義づけていた副誌名が見当たらずに気づくだろう。第2号以下ある時期まで、本誌には『同志社大学大学院英文学専攻学生研究論文集』という副誌名を掲げていたはずだ。なぜか、それは創刊号については「同志社大学 core 出版局」刊の厳密には同人誌の形で刊行されたからである。もちろん現在の規約では、郵便法改正への対応もあり刊行母体を *Core* 同人会としているのだが、創刊号についてはいささか事情が異なっている。まずは当時の院生の研究活動の在り方を振り返っておこう。たとえ

ば『L.L.L』No.61に1969年イブ明けに開催された「大学院英語英文学研究発表会」の報告が掲載されている。3週連続の土曜日午後、3名ずつの研究発表という自主的な運営になるプログラムである。一瞥すればわかるように、院生たちは研究成果を旺盛に発信する意欲に満ちていた。69年の暮れという時代がなせるのか、先輩たちはハングリーであった。口頭による研究成果発表に加えて論文発表の場をも希求していた先輩院生たちの意欲に、先生方と英文学会は応えてくださることとなる。1973年には英文学会の財政援助が与えられて、第2号の刊行をみることが出来た。「同志社大学英文学会 Core 編集部」刊の『研究論文集』という副誌名を掲げることとなったのは、この号からである。

創刊号から第2号へ、種子が芽生えていくこの間の動きはまことに院生と先生方、英文学会が相互に研究の活性化へと模索していく過程であった。創刊号刊行の半年前に出された『L.L.L』No.64で太田会長は、会長ご就任への抱負を記された巻頭記事において、こう書かれている。

「研究活動をさらに活発にするために、新たに大学院ならびに学部学生会員にたいし研究の補助を決定した。院生会員の間では早くもこれに対応して、研究論文出版の作業が開始されている。学生会員の間においてもこの企画が具体化され、立派な実をむすぶことを期待する。」

英文学会の支援は会計上の活動補助という形で具体化され、1975年度予算に明記されることとなる。芽生えから若葉の萌えも確かであるかに思われた。しかしながらいつの場合でも道は平坦ではない。創刊から第3号刊行までの道のりを暖かく支えてくださった英文学会ではあったが、この時期その会計は慢性的に苦しい状態にあった。太田先生、そしてその後を継がれた

木村 俊夫先生、斎藤 勇先生と代々の会長が、赤字を基金の取り崩しなどでやり繰りされてきたご苦心のほどを『L.L.L』誌面でも吐露されている。1974年というから、筆者が服部昭郎先輩、同期の山下 昇君と第3号の編集を担当した当時であったと思うのだが、次号の刊行を企画するにあたって英文学会からの財政援助を全面的に期待することに甘んじてられない、という認識が院生に共有されていた。なんとか単年度分であっても、自分たちで刊行事業を担うにたる蓄えを確保し、あわせて院生の学術研究の助成を図ることを趣旨として、『コア』基金を設置することとした。基金設立の経緯はこのように危機対応の性格が強かったのであるが、設置された基金を今後どのように各年度ごとに維持運用していくか、という問題は翌年、院生の間で多様な意見交換を喚起することとなった。『L.L.L』No.68から「七五年度『コア』活動報告」を引用する。

「この基金の意図を持続するか否か、二十日の総会で討議され、二十七日に再度総会が開かれました。『コア』基金については、設立当時の目的を持続することを議決し、基金として常時一定の額を維持し、一定の手続きの下で、日常の研究活動にも使用できるようにし、毎年始めに負担金を徴集することに決めました。」

今日の目から眺めるならば、いったい何に拘泥して、と映るかもしれない。だがその当時、おそらく時代の気分共振していた私たちは、*Core*の刊行をひとつの運動形態としてイメージしたいと思っていた、といえば伝わるだろうか。基金の維持が会費の分担であるかのように、あらかじめ先に定まっているものとして無自覚に関与していくものであってはならないだろう、そんな「青くさい」意気込みだった。青くさい拘りではあったが、一抹の真実

がはらまれていたことはいまでも疑いはしない。Core の刊行を動き続ける運動形態として関わっていくこと、40年の歴史と位置付けを獲得してはいても、それは所与の制度として固定されるのではなく院生主体のそれぞれの仕方による関与に応じて動き開いていく運動体として関わっていくこと—新町校舎4階に共通スペースとしてはスプリングが駄目になった長椅子二脚しか持たなかったかつての院生たちが、総会の再度開催をもいとわずに語ろうとしていたのはそのような思いであった。

「巻頭言」と「あとがき」への脚注として書き始めたこの文章を、ふたたびそれぞれからの引用でもって終わることにしよう。Core がこれからも前へと弾み続ける運動であることを願いながら。

「必要なのは、若者の生命の若さと夢多き望み。若さと夢はありがたいことだ。未来は洋々、この研究誌を砦に、明日への力となられよ。はつらつと進まれよ。」(「巻頭言」)

「われわれ自身はもちろん、多くのあとに続く人たちがこの一段を踏みしめて、自分を—また対象を一見きわめる最初的手段とされることを切に希望し期待する。」(「あとがき」)